

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Minpaku Tsushin no.163; Cover, Contents, and others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-01-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009308

民博通信

評論・展望

イスラームの語源は「平和」か

中東地域における文化資源の現代の変容と
個人空間の再世界化の研究にむけて

西尾哲夫

No. 163

2018



国立民族学博物館

民博通信 No.163

『民博通信』は、国立民族学博物館の研究広報誌です。本館において、現在計画中、および進行中の研究について、その学術的な特色、独創的な点、期待される成果などを、研究者を中心に広く発信するのが目的です。



国立民族学博物館アメリカ展示場 ワシの頭つき首飾り H0219579

民博通信 No.163
2018 年 12 月 28 日

編集委員
卯田宗平（編集長）
伊藤敦規
宇田川妙子
藤本透子
三尾 稔

編集・発行
人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒 565-8511
大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話：06-6879-2151
http://www.minpaku.ac.jp/

制作
毎日新聞大阪本社 大阪事業本部

国立民族学博物館の研究

【基幹研究プロジェクト】

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進します。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

【特別研究】

「現代文明と人類と未来—環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施していく。その作業を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的とする。

【共同研究】

特定のテーマについて、公募も含めて館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、2～3年の期間で成果をあげる活動です。2018年度には、31件の共同研究プロジェクトが組織されています。

【基幹研究プロジェクト】

プロジェクト名	研究代表者	研究期間(年度)
機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築		
○開発型		
中央・北アジアの物質文化に関する研究—民博収蔵の標本資料を中心に	寺村 裕史	2018—2021
アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田 卓	2017—2020
民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	齋藤 玲子	2016—2019
台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	野林 厚志	2015—2018
○強化型		
民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築—オセアニア資料を中心に	丹羽 典生	2018—2019
ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築	南真 木人	2018—2019
中南米地域の文化資料のフォーラム型情報データベースの構築	八木 百合子	2018—2019
朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	太田 心平	2017—2019
中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	西尾 哲夫	2017—2018
広領域連携型プロジェクト		
文明社会における食の布置(「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット)	野林 厚志	2016—2021
日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築(「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット)	日高 真吾	2016—2021
ネットワーク型プロジェクト		
北東アジア地域研究	池谷 和信	2016—2021
現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016—2021
南アジア地域研究	三尾 稔	2016—2021

【特別研究】

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)
パフォーマンス・アーツと積極的共生	寺田 吉孝	2018—2020
食料生産システムの文明論	野林 厚志	2017—2019
生物・文化的多様性の歴史生態学—希少動物・希少植物の利用と保護を中心に	池谷 和信／ 岸上 伸啓	2016—2018

【共同研究】

◎一般	●は館外の代表者	
研究課題	研究代表者	研究期間(年度)
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間 計博	2018—2021 ●
統治のフロンティア空間をめぐる人類学—国家・資本・住民の関係を考察する	佐川 徹	2018—2021 ●
カネとチカラの民族誌—公共性の生態学にむけて	内藤 直樹	2018—2021 ●
伝統染織品の生産と消費—文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる心配と係り合いについての人類学的探求	中谷 文美	2018—2021 ●
グローバリゼーションにおける「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	西 真如	2018—2021 ●
ネオリベラリズムの中のモラルティ	山 泰幸	2018—2021 ●
人類学／民俗学の学知と国民国家の関係—20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	田沼 幸子	2017—2020 ●
文化人類学を自然化する	中生 勝美	2017—2020 ●
現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	中川 敏	2017—2020 ●
もうひとつのドメスティケーション—家畜化と栽培化に関する人類学的研究	浮ヶ谷 幸代	2016—2019 ●
捕鯨と環境倫理	卯田 宗平	2016—2018
会計学と人類学の融合	岸上 伸啓	2016—2019
音楽する身体間の相互作用を捉える—ミュージッキングの学際的研究	出口 正之	2016—2018
「障害」概念の再検討—触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	野澤 豊一	2016—2019 ●
考古学の民族誌—考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	廣瀬 浩二郎	2016—2018
医療者向け医療人類学教育の検討—保健医療福祉専門職との協働	ERTL, John	2015—2018 ●
確率的事象と不確実性の人類学—「リスク社会」化に抗する世界像の描出	飯田 淳子	2015—2018 ●
宇宙開発に関する文化人類学からの接近	市野澤 潤平	2015—2018 ●
個—世界論—中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	岡田 浩樹	2015—2018 ●
放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	齋藤 剛	2015—2018 ●
応援の人類学—政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	中原 聖乃	2015—2018 ●
グローバリゼーション時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	丹羽 典生	2015—2018
驚異と怪異—想像界の比較研究	松尾 瑞穂	2015—2018
山中 由里子	山中 由里子	2015—2018
課題2：本館の所蔵する資料に関する研究		
博物館における持続可能な資料管理および環境整備—保存科学の視点から	園田 直子	2017—2020
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田 浩志	2016—2019 ●
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野 泰彦	2015—2018

◎若手

研究課題	研究代表者	研究期間(年度)
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田 瑞穂	2018—2020 ●
モノをとらえてみる現代の宗教的世界の諸相	八木 百合子	2017—2019
消費からみた狩猟研究の新展開—野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石 高典	2016—2018 ●
テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田 晶子	2016—2018 ●

研究成果の公開——最近開催されたシンポジウム等から

写真展

「中国の鵜飼——卯田宗平フォトコレクションから」

日時：2018年9月5日(水)～11月5日(月)
場所：岐阜市長良川うかいミュージアム特別展示室
主催：岐阜市長良川鵜飼伝承館
共催：国立民族学博物館



鵜飼とは、魚食性の鳥類であるウミウ(ウミウヤカワウ)を使った漁法である。ただ、ひとことで鵜飼といってもその技術に大きな違いがある。

日本の鵜飼では、おもに茨城県日立市で捕獲された野生のウミウが利用されている。各地の鵜匠たちは、日立市から送られてきたウミウを飼い慣らしている。一方、中国では、漁師が繁殖させたカワウを利用して、このほか、中国の鵜飼はいまでも生業として続けられていることや手縄を使用しないことなどの特徴もある。

このたび、岐阜県長良川うかいミュージアムにおいて、中国の鵜飼に関わる写真展を開催した。写真展では、卯田宗平(本館准教授)が中国各地で撮影した鵜飼にかかわる約32,000点の写真のなかから「中国各地の鵜飼の風景」や「カワウの繁殖技術」、「一日の操業のようす」にかかわる写真を選びだし、日本の鵜飼とは大きく異なる中国の鵜飼を紹介した。このほか、岐阜市民講座「中国の鵜飼について」も開催し、満員の参加者と鵜飼文化の今後について話しあった。写真展を通して、市民の方々に中国の鵜飼の姿を理解する機会を提供できた。

国際シンポジウム

「フィジー諸語と地理情報システム、および博物館展示への応用」およびサテライト・ワークショップ

日時：2018年9月18日(火)～21日(金)、シンポジウムは20日(木)
場所：国立民族学博物館
後援：日本言語学会、日本歴史言語学会、日本オセアニア学会
協力：日本財団助成国立民族学博物館手話言語学研究部門(みんぱく手話部門)

本シンポジウムは、国際学際共同研究「地理情報システム(GIS)を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析」(研究代表者：菊澤律子本館准教授、期間：2017年4月から2019年3月、りそなアジア・オセアニア財団助成事業)の研究結果公開の一環として開催したものである。この共同研究は、フィジー語に関わる300あまりの地域変種のデータを地図情報と組み合わせ、通時・共時両側面から言語分析を行うためのツールを開発し、実際の分析を進めるプロジェクトである。日本とフィジー、ニュージーランドの言語学、地理学、統計学、文化人類学を専門とする研究者が通常メールでのやりとりを通して分析を進めている。サテライト・ワークショップでは、メンバー全員がはじめて直接、顔を合わせる機会となり、分析の方法および進行状況を全員で確認・共有し、今後の研究の進め方について議論した。また、公開シンポジウムでは、フィジーの言語に関する現状、GISを利用する意義と見通し、博物館における研究成果の活用について報告を行った。今回は、2019年3月末にフィジーの南太平洋大学で同様のワークショップおよびシンポジウムを行い、今後につなげる予定である。



「北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道」会議の様子。

「北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道」

日時：2018年9月22日(土)～23日(日)
場所：国立民族学博物館
主催：NIHU基幹研究プロジェクトネットワーク型「北東アジア地域研究」



今回の国際会議は、文化、経済、政治、環境などから北東アジアをとらえることによって、地域の全体像を把握し、人類の共生の方法を模索することを目的とした(参加者73名)。

今回の会議では、まず文化を長期と短期という2つの時間スケールに分け、前者に関しては人やものの移動からみた先史時代から現在までの文化史(①民博拠点)、後者に関しては近代化にともなう思想や文化の歴史的な変化(②島根県立大拠点)に焦点をおいた。また、経済の分野では、おもに森林資源を対象とし、森林産物をめぐる国際貿易を検討した(③富山大拠点)。国際関係の分野では、中国と韓国、日本をおもな対象とし、国家の枠組みにとらわれないサブ地域を単位とする研究視角が重視された(④北海道大拠点、⑤早稲田大拠点)。最後に、近年の環境問題に関しては、地球温暖化と排出ガスとの関係、炭素税といった新たな法律の試みが紹介された(⑥東北大拠点)。

これまでの北東アジア地域では、政治経済を中心として国家単位での議論が中心になされてきた。これに対して今回の会議では、国家以外の単位で、とりわけ文化的側面を重視し、時間軸を長期と短期に分けることで地域をより総合的・動態的に把握することに成功した。

NEWS

みんぱくのうごき

◆ 研究部の人事異動

- ◆ 研究部教員の着任(10月1日付)
・大石侑香 [学術資源研究開発センター・特任助教] 専門は社会人類学。シベリアのトナカイ牧畜や漁撈、キツネ・ミンク飼育といった生業文化について研究しています。
- ◆ 拠点研究員の着任(11月1日付)
・田中鉄也 [南アジア拠点] 専門は宗教学。北インドの寺院調査を通じて、宗教と公共性、さらには宗教と法とのかかわりの変容について研究しています。

◆ 受章

- ◆ 杉田繁治名誉教授「瑞宝中綬章」受章(2018年11月3日)

◆ シンポジウム等

- ◆ みんぱく公開講演会「音楽から考える共生社会」
日程：2018年11月2日(金) 場所：日経ホール
主催：国立民族学博物館、日本経済新聞社
- ◆ 公開フォーラム「世界の博物館2018」
日程：2018年11月3日(土・祝) 場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館、独立行政法人国際協力機構
- ◆ シンポジウム「バスケットリーと人類」
日程：2018年11月3日(土・祝) 場所：国立民族学博物館
主催：大阪日本民芸館、新学術領域研究(パレオアジア文化史学)「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」
- ◆ 第34回人文機構シンポジウム 国際シンポジウム「市民とともに地域を学ぶ——日本と台湾にみる地域文化の活用術」
日程：2018年11月10日(土) 場所：TEPIAホール
主催：大学共同利用機関法人人間文化研究機構
後援：文部科学省、日本博物館協会、日本台湾交流協会、朝日新聞社、毎日新聞社、産経新聞社
- ◆ 国際シンポジウム「世界の捕鯨と捕鯨問題」
日程：2018年11月30日(金)～12月2日(日) 場所：国立民族学博物館
- ◆ 講演会「台湾客家と日本客家」
日程：2018年12月14日(金) 場所：国立民族学博物館
- ◆ 国際シンポジウム「客家エスニシティとグローバル現象——華僑華人の拡がり」と現在」
日程：2018年12月15日(土)～16日(日) 場所：国立民族学博物館
- ◆ 日本アンデス調査60周年記念シンポジウム「アンデス文明の成り立ちを追って——日本調査団の継承と発展」
日程：2018年12月22日(土) 場所：東京大学伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホール
主催：アンデス考古学調査60周年記念事業実行委員会、山形大学
共催：国立民族学博物館
協力：古代アメリカ学会、山形大学ナスカ研究所、アンデス文明研究会、一般社団法人希有の会、埼玉県ペルー友好協会

◆ 刊行物

- 『ストリートの精霊たち』
川瀬慈著、2018年4月、世界思想社。
- 『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』
岸上伸啓編著、2018年4月、ミネルヴァ書房。
- Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates* (SES 99).
R. Fleming Puckett and Kazunobu Ikeya (eds.), Jul. 2018, National Museum of Ethnology.
- 『「ホーホー」の詩、それから——知の育て方』
信田敏宏著、2018年10月、出窓社。

訂正

- 『民博通信 162号』p.10 基幹研究の名称
誤：文明社会における食の布置(「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット)
正：台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応

目 次

国立民族学博物館の研究 03

イスラームの語源は「平和」か
——中東地域における文化資源の現代的変容と
個人空間の再世界化の研究にむけて

西尾哲夫 04

データベースの自由検索が不自由なとき

——標本資料の検索を変える一試み

基幹研究●朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する
日米共同研究

太田心平 10

現代日本の看取りに「文化」という語の使用は可能か

共同研究●現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究
渥美一弥 12

ドメスティケーションが生起する条件

——しない／できない事例から考える

共同研究●もうひとつのドメスティケーション
——家畜化と栽培化に関する人類学的研究

卯田宗平 14

紛争下の文化遺産——復元を考える

共同研究●考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・
変成過程の研究

山藤正敏 16

リスクと不確実性の対立を超えて

共同研究●確率的事象と不確実性の人類学
——「リスク社会」化に抗する世界像の描出

阿由葉大生 18

移ろいのなかで育まれる人と知

共同研究●個—世界論
——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム

齋藤 剛 20

共感の当事者性・生成する主体の当事者性・

方法としての当事者性

共同研究●放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究
関 礼子 22

現場と研究者をつなぐ——韓国農楽の2010年代の研究動向

神野知恵 24

ただいまオンエア——みんぱく映像民族誌

三島禎子 25

研究成果の公開 26

みんぱくのうごき 27

表紙写真

- ① サウジアラビアの援助で建設された
ニューカレドニアのモスクの入り口。
アラビア語で信仰告白の文が書かれ
ている(本誌4-9頁)
- ② 村から村へ移動するラジオ局の中継
車(本誌25頁)
- ③ モロッコの古都フェズの旧市街(本
誌20-21頁)

